

Early Man

—As Depicted by Leading Authorities at the International Symposium the Academy of Natural Sciences Philadelphia, March 1937—

初期人類換言せば洪積世の人類自然史、文化史の諸學がその誕生を祝つてから漸く一世紀の歲月が流れた。此の間の學界の論議は一八六六年以後の萬國先史學會議等の問題となつて居り、また萬國人類學・先史考古學會議(Congrès international d'Anthropologie et d'Archéologie)の如きに於いて斯學の論争が物語られてゐる。而して二十世紀に入つてから現在に至る萬國先史學・原史學會議(Congrès international des sciences Préhistoriques et Proto-historiques)及び萬國人類學・土俗學會議(International Congress of Anthropologic & Ethnologic Sciences)の如きは共に舊大陸に於ける右の過去の傳統を今日にまで繼承したのに外ならない。これらに對して大戰後の初期人類の研究は、その領域を空間的に擴大した。本書はこの後者の縮圖とも云ふべきものである。吾人は本書の諸論文を見て人類初期の研究が一世紀後の今日更に新鮮な領域へ轉火し始めた事を知るのを喜ぶ者である。本書は一九三七年三月北米ヒラデルフィヤにてこの地の自然科學學士院の第二二五回の記念祭を祝賀する爲に The International Symposium on Early Man なる名の下に、諸學者に依つて世界の初期人類に關する新發見、新研究が論議されたもの、收録に他ならない。この會議の目的が萬國先史學・人類學の諸權威の論文を集める事、世界各

地の新發見の遺物を中心とする事、更に先史學者・人類學者・古生物學者・洪積地質學者等相互の協力を助成する爲であり、かくて集められた三十五氏の諸論文は何れも學界に於ける斯學の新發見に屬してゐる。之を十九世紀後半當初の新發見に關するこの種論叢に較べると過去の百年が如何に斯學發達上意義深いものであつたかを思はすに充分である。しかも十九世紀の斯學發達史に登場しなかつたアメリカが、今突如と新鮮の氣を學界に瀦してゐるのは注目し値する。以下ばら／＼に掲載された諸篇を少しく順序立てて概観しよう。

先づアメリカ以外では近東に於ける American School of Pre-historic Research に依る研究が注意される。A. E. Garrod 嬢の論文はこの地域を三區分し、一、ベルシヤ西境、二、今日の北アラビヤ沙漠、三、パレスティンに分ち、この地のアシニール期文化は西歐のものに、また中期舊石器時代ではアフリカの影響が大きくそれが東方に擴がつたが後期舊石器時代以降からはアジアの影響が大となつた事をこの地の地理的位置から述べ、かの Teyacan 工業文化、Levallois-Mousterian 文化、Natufian 文化を夫々例證解説して居り、更に Sir A. Keith 氏及び T. d. McCown 氏は一九三一、二年發見の Mount Carmel 西麓の石灰洞發見の Teyacan 文化から Levallois-Mousterian 期までに入る Neanderthaloid に屬すると思はれる Skuhl type 及び Tabun type の人骨を解説したものである。次にアフリカ方面では一九二四年 Bechuanaland の Tunnas 石灰洞にて發見され Dart 教授が Australopithecus

africanus と名付けたものに連關して、三六年同教授の弟子が發見したそれに類似のものを R. Broom 氏が取り上げて紹介し、その屬性、齒牙を吟味してゐる。それは有名な Australopithecus transvaalensis なる類人猿頭蓋である。亞細亞のインドでも類人猿化石がマンントンの The Carnegie Institution の手に依り Swalk Hills で發見されたものがあり、Helmut de Terra 氏は之を説明してゐる。一方ジャバにてもビテカントロプスの發見された、かの Trinit Zone が地質學者に調査されてゐるし、更に中部ジャバの段丘から一九三一年發見されたかの Solo の人骨研究が盛である。G. H. R. von Koenigswald 氏は右のジャバの洪積人類文化を概觀して、同地の初期人類の進展にはイアッスがない事を明らかにし、更に Eugène Dubois 氏は同じ様な題目で Homo solensis はビテカントロプスとちがひ、眞の人類であり Proto-Australian であつて一方 Rhodesian Man と近似する事を述べてゐる。W. F. F. Openoorth 氏の文もソロ人が化石人類に占むる位置を概觀したものである。

東洋方面では我國石器時代を鳥居博士が概觀した他 A. S. Loukaschin 氏は北滿 Chalinor の舊石器時代遺跡を紹介し、Fère P. Teilhard de Chardin 氏は北支・南支の三期の洪積地層をインド・ジャバ・北米のものと對比し年代を考定して居り、なほ斐氏の支那の舊石器遺跡を解説した文もある。氏は從來の周口店、オルドスのもの、他に Nihovan 周口店でも Locality 13 のものを概記して併せて全體の年代の見とほしを行つてゐることが注意せられ

る。北歐の研究ではノールウエイの北端の海岸線に沿つた六十數箇の遺跡 (abris) ではなく Stations de plein air に屬する) を概觀した A. W. Brøgger 氏の報告、即ち遺物としては後期舊石器なる burins 等の他にシヤンベニーの tranchets 或は細石器が存する事を報告し、Gorden Childs 氏が泥炭その他の研究を集めて北歐ヨルヂヤ期以降の文化就中マクレモージアン文化の地理學的考察を加へた一編、更に Kay Birket-Smith 氏のエスキモの文化を探險史的に説明したもの等が數へられる。

本書を飾るものとも見る可きアメリカの方面では先づ南米のそれに關して Paleo-American race の最も原始的なものの Confins 洞發見人骨をば H. V. Walter, A. Cathoud & Amibal Matos 兩氏の解説した一編があり、また P. S. Smith 氏がアジヤ・アメリカ大陸の交通線の問題即ち Siberia-Alaskan Bridge は、地質的には兩者のギャップが今日程大でなかつた事、アラスカには氷河の周邊に既に交通路があり得た事を述べてゐる。さて北米では洪積氷河を研究したものに Paul Mac Clinkock 氏の文がある。氏はその間氷層序研究の種類を説明しこの地の四氷期 4 Wisconsin glacial & Illinoian glacial (Sangamon interglacial) & Kansan glacial (Yarmouth interglacial) & Nebraskan glacial (Aftonian interglacial) の層序を一々檢したのであつた。更にこの地の最初の居住即ちウイスクンシン氷期以後の氣候を人類文化との關係づけに就いて Ernst Antevs 氏は、特に南カルフォルニヤの Lake Mohave 文化、南東アリゾナ及びニューメキシコの Cochise 文化の性格を

述べてゐる。次ぎに一々の文化の闡明に就ては例へばテキサス及び南東アリゾナのそれは Harold S. Gladwin 氏、ニュー・メキシコ方面の Folsom 文化に就ては T. H. H. Robert 氏、その絶滅ビズンを伴ふ層序に就ては Kirk Bryan 氏がそれ〴〵説明をなしてゐる。同様にこの北米の洪積地史、古生物の研究は Edwin H. Colbert 氏及び H. Barbour, C. B. Schultz 氏等が行つて居り、就中後者は Nebraska 地方の文化をも説明したものである。

以上の如き個々の新發見の記述とは別に、本書中またこの種の研究法の新しい試みがみられる。アメリカのフィールドに於ける古地理的な研究がそれである。即ち軟體動物、主として貝類からそれを行ふ方法として、例へば F. C. Baker 氏がハドソン灣の海成軟體動物の研究から當時の氣候を考定し且つ形態の變化からその年代を推したものがあつた。H. G. Richards 氏も内陸及び淡水産軟體動物の研究から同様な試みをなしてゐる。その他近頃北歐で流行してゐる Pollen Analyse の研究がこの地に於いても見られる。P. S. Sears 氏はアリソナの峡谷の Silts に於いて之を行つてゐるのであり、又 M. M. Leighton 氏は層序に於ける Weathering の檢出を試みてゐる。その他 Gerard de Geer 氏が年々の氷河の Varves の研究即ち Geochronologie の研究を提唱した編があり、なほ一般論として W. K. Gregory, M. Hellman 氏が一九二〇年以後發見の類人猿化石人類の齒牙を研究したものや、O. Menghin 氏が舊石器文化の系列を考へたものなどもあり。後者は氏の Protolithikum に既に Faustkeil, Klingen, Knochen の別々の文化が

混成してゐたと言ふのである。

本文三六二頁、圖版二六葉。世の先史學・人類學・先史地理學・古生物學に興味を有する士が斯界の現状を知るに好參考たること以上の概記からこれを知り得るであらう。(藤岡謙二郎)

彙報

史學研究會

五月八日(日)午後一時より關西日佛學館講堂に於て開催、今回は特に史料の展觀を主とし、内山貞三郎氏の講演の外、外山軍治、西田直二郎、梅原末治三氏に請うて陳列品の解説を行ひ五時過閉會した。當日は雨天にも不拘、普通會員の外、一般同好の士をも加へて來會者約百五十名、頗る盛觀を呈した。

當日の講演要旨並に陳列品目錄は左の如くである。

啓蒙時代の獨逸演劇

内山貞三郎

歐洲大戰と表現主義文學とが密接な關係にあると言はれる如く、三十年戰役とバロック文學とは必然的な聯關に立つてゐる。兩者の文學がよし如何に奇怪なものに見えやうとも、前者が長い間の物質文明の害毒——それが歐洲大戰を齎した——に對する精神の反逆として起らざるをえなかつた様に、後者の文學は、かの戰亂の世期に於て明日の運命をも豫知しえない王侯と統治の中心を失つた民衆との奇怪にして慘虐なる現状を見た高級官吏又は貴